

文献紹介〈伝来薬「心躰安樂丸」〉諸本

羽 鳥 佑 亮

論文要旨

江戸時代後期から戦前期頃まで享受された雑多な戯文のひとつに、極楽から伝来した薬の広告に模し、教訓を示すものがある。拙稿「戯文〈伝来薬「心躰安樂丸」〉の濫觴と展開に関する小攷」（『伝承文学研究』第七三号、三弥井書店、二〇二四）では、これらの統一題目を〈伝来薬「心躰安樂丸」〉とし、諸本を検し系統をたて、各々がいかなる考えにより展開したかを論じた。これにより、施印や仮名法語を含む、何らかの教化の方便であろう戯文を「教化戯文」とすることを提言した。しか

し、紙面の都合により、文献の内容を紹介するには至らない。〈伝来薬「心躰安樂丸」〉は、出所が不詳であることの多い、戯文の伝承をみるに、好文献であるにも関わらず、ほとんど忘れ去られ研究の俎上に載らない。そこで本稿では、管見に入る限りの諸本を、先の拙稿で示した甲種から壬種を第一類から第五類とする系統を用い整理することで、比較を容易にする文献紹介を行う。

【キーワード】極楽、薬、広告、施印、仮名法語

緒言

江戸時代には、処世訓や俚諺を羅列したり、ある考えを平易に記したりとした、何らかの教化の方便とする戯文が散見される。また、教化の要素がなくとも、薬そのものに、乃至、薬の宣伝に模した体裁の戯文も多い。

ここに、どちらをも兼ね備えた、多く「極楽傳來心躰安樂丸」と題する戯文がある。この極楽伝来の妙薬は、江戸時代後期から戦前

期頃までは広く享受されたようだが、現在では忘れ去られている。先んじて、拙稿「戯文〈伝来葉「心躰安樂丸」〉の濫觴と展開に関する小攷¹」において、表記の揺れにより統一題目を〈伝来葉「心躰安樂丸」〉としてとりあげ論じ、特定の考えによらず教化の方便としてあらわれる戯文を「教化戯文」とした。だが、紙面の都合により、その内容の紹介には至らなかった。

このような雑多な戯文は、いわゆる、大文学でもなければ、大作家によるものでもない。そのため、研究されることもなく、言及されることすら稀である。研究の蓄積が多い戯作とは、似つつも大きく異なる領域であろう。異類合戦物を含めた伊藤慎吾氏による論考²があるほかは、言葉遊びや擬人名など近い領域での、鈴木棠三氏による論考³があるほどで、戯文の研究が盛んとはいえない。また、これらの戯文があまりに雑多で通覧するに難のあることも、研究の滞る要因のひとつであろう。だが、隣接する、御伽草子、戯作、噺本、狂歌などとも密接に関わる領域として位置づけられ、これらの伝承を論考するにも重要である。

教化の要素をもつ戯文に限れば、施印に関する研究がわずかに散見される。心学の教化を主として用いられたであろうという、漠然とした前提があるようだが、施印は何も心学の徒のみによる専売特許ではない。一方で、平易なために広く享受され、教化のため人々に影響を与えたと考えられる戯文は、その心意を探るに好ましい。

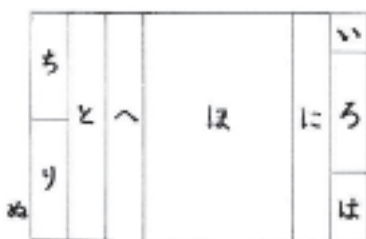
そこで本稿では、これらを研究する手はじめに、〈伝来葉「心躰安樂丸」〉を例にとり、文献紹介として管見の限りの諸本を示し、内容の検分を行う。改題や改作のなされた文献を除いては、雑多な戯文のひとつの諸本を比較し通覧する、恐らくは初のこころみであろう。なお、先行研究については、前述の拙稿を参照されたい。

一 〈伝来葉「心躰安樂丸」〉構成

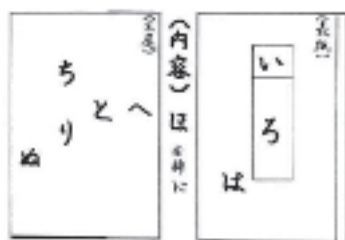
まずは、〈伝来葉「心躰安樂丸」〉がどのようなものであるか、基本的な構成を示し位置づける。体裁は、一枚刷、木版本、書写本、活字版本など様々であり、一般に基本となる構成は図示した【構成】のとおりである。一枚刷を基本とするが、他の体裁であっても構成の順番などはほとんど変化しない。

【構成】

。一枚刷



。冊子



例外はあるが、基本となる構成として、〈い〉では、「○○傳來」と伝来薬である由が示され、多く、「極樂傳來」とする。〈ろ〉では、ほとんどが「心鉢・心體・心体」と冠する、「安樂丸」という名称である。〈は〉では、多く、「大包・小包」と、一行ほどの用法や説明が記される。〈に〉では、道歌が付されることがある。〈い〉から〈に〉は前半部にあたることから、便宜上、《前文》とする。

〈ほ〉では、教化に関する、俚諺、乃至、散文を、効能・調剤として連ねる。多く場所をとる主となる箇所であるため、また中央部にあたることから、〈ほ〉のみで、便宜上、《本文》とする。

〈へ〉では、詳細な用法や説明が記される。〈と〉では、多く、何らかの道歌が付される。〈ち〉では、ほとんどが「(家内・本家)和合所・(家内・本家)調合所」による処方である由が記され、稀に、場所が付される。〈り〉では、ほとんどが「其身野徳成」による処方である由が記され印があり、多く、一行ほどの用法や保証が付される。〈ぬ〉では、配布・施印の由を基本とし、作成の経緯、成立年などが記されることがある。〈へ〉から〈ぬ〉は後半部にあたることから、便宜上、《後文》とする。ただし、順番の前後や配置の揺れが特に多い箇所である。

このような基本的な構成は、一枚刷は殊に、架蔵「蕃紅花人參湯」一枚刷や、内藤記念くすり博物館蔵「御免秘法鎮痙丸」一枚刷をはじめとする、江戸時代頃に出された薬の広告と類似する。「心肝安樂丸」という丸薬の、効能・調剤などを記す宣伝などの体裁に模した、教化戯文として位置づけよう。

二 〈伝来薬「心肝安樂丸」〉 諸本

〈伝来薬「心肝安樂丸」〉についての実態把握を行い、現存に確認できた諸本の体裁（翻刻のみ確認には「翻刻ノミ」を、年記の明記されるものにはその由を示し、「略称」を付した便宜的な名称を羅列した。なお、体裁の箇所注記がなければ冊子である。

まずは、先の「〈伝来薬「心肝安樂丸」〉構成」に合致するものに限定し、管見に内容まで確認できた諸本（翻刻のみ確認を含む）について、「年記の明記されるもの」、「年記のないもの」の順に羅列する。ただし、紙面の都合により諸本の詳細な書誌は略す。

◎年記の明記されるもの

- ・書写 文政 元年（一八一八）…〔石法〕 石川翁資料館蔵本明寺法親書写本
- ・書写 天保 七年（一八三六）…〔羽瀧〕 架蔵播州岸上弘化五年瀧澤書写本⁴
- ・書写 天保 一四年（一八四三）…〔西借〕 西尾文庫蔵榊屋借用書写本
- ・翻刻ノミ 嘉永 三年（一八五〇）…〔川文〕 川端市太郎文書本⁵
- ・書写 元治 二年（一八六五）…〔羽生〕 架蔵生江由光書写本
- ・木版^カ 明治 一四年（一八八二）…〔国五〕 国立国会図書館蔵五角堂本
- ・謄写版^カ 明治 一四年（一八八二）…〔国蓮〕 国立国会図書館蔵蓮光寺本
- ・活字版 明治 二四年（一八九一）…〔東お〕 明治新聞雜誌文庫蔵『おしへ』第四十號「雜纂」

- ・活字版 明治三〇年（一八九七）…〔農號〕架藏『農事の友』號外
- ・木版^カ 明治三二年（一八九九）…〔羽新〕架藏取次坂井新吉版本
- ・謄写版^カ 大正 八年（一九一九）…〔京麓〕京都大学文学研究科藏麓の近みち本
- ・活字版 昭和十一年（一九三六）…〔偲附〕『偲もしすり』附録

◎年記のないもの

- ・一枚刷 …〔羽板〕架藏一枚刷板木
- ・一枚刷 …〔羽浪〕架藏浪花平三何某一枚刷
- ・一枚刷 …〔早一〕早稻田大学図書館蔵一子相傳一枚刷
- ・一枚刷 …〔早加〕早稻田大学図書館蔵加納順樂一枚刷
- ・一枚刷 …〔中塩〕中山家文書塩屋與三兵衛一枚刷
- ・一枚刷 …〔笠一〕横浜開港資料館委託小笠原家文書一性安樂丸一枚刷
- ・一枚刷 …〔歛一〕施主大坂何某歛心舎再出一枚刷（※現所蔵不明、影印・翻刻による）⁶
- ・一枚刷 …〔凌一〕凌霄文庫旧蔵後藤氏施印一枚刷（※現所蔵不明、影印・翻刻による）⁷
- ・木版 …〔羽静〕架藏静安舎施印版本
- ・木版 …〔羽寿〕架藏山田佐助寿版本（※現存二冊架藏）
- ・木版 …〔羽小〕架藏小谷氏施印版本
- ・木版^カ …〔一田〕一橋大学附属図書館蔵田村版本
- ・冊子^カ …〔河集〕河野省三記念文庫蔵施印集本
- ・書写 …〔羽片〕架藏片仮名書写本

- ・書写 ..〔羽菊〕 架蔵大谷持主菊藏書写本
- ・書写 ..〔羽奉〕 架蔵一枚書写奉書
- ・書写 ..〔名算〕 名古屋大学蔵算法記書写本
- ・翻刻ノミ ..〔菱父〕 菱山栄造氏蔵父の小言本⁸
- ・翻刻ノミ ..〔吉佐〕 吉条家文書佐味田村諸式富帳本⁹
- ・翻刻ノミ ..〔西文〕 西山邦雄家文書本¹⁰
- ・翻刻ノミ ..〔森霊〕 森嘉兵衛資料本¹¹
- ・翻刻ノミ ..〔草文〕 草彌文書本¹²
- ・翻刻ノミ ..〔安文〕 安川新也文書書置覚¹³

さらに、存在のみは確認されるが、稀覯本である、乃至、個人蔵であるなどして、管見に内容まで確認できなかった諸本があり、〈伝来葉「心鉢安樂丸」〉にさらに改変を加え派生したと思われる、先の「〈伝来葉「心鉢安樂丸」構成」には合致しない、散文を連ねるものもある。また、孤立するものながら〈伝来葉「心鉢安樂丸」〉と明らかに関わるが、一部において差別化がはかれる、〈伝来葉「心鉢安樂丸」〉とは異なる文献がある。〈伝来葉「心鉢安樂丸」〉の広まりをみることで、参考として記す。

◎存在のみが確認されるもの

・『明治文學』第八號、明治文學會、明治二七年（一八九四）。『徳風』第廿四號の広告が掲載され、目次に「◎雜錄（中略）○心體安樂丸（曉夢齋主人）」とある。「發行所 愛知縣三河國碧海郡知立町稱念寺内 徳風發行所」とあり、発行の一向山稱念寺への書面での問合せの返信によると、残部は全て法應山西方寺に寄贈の由。さらに法應山西方寺への書面での問合せによると、『徳風』残部は御所蔵だが、『徳風』第廿四號は欠番。

- ・林正章「孝學道の開祖とその主張」『文獻』第二號、特殊文庫連合協議会、昭和三四年（一九五九）。「庶民教化としての心學の地歩は有名であるが無窮會圖書館には孝學道の資料があるから紹介したい。（中略、「孝學道人菅原友山」の略歴と『孝連人物考』（当該文献不詳）から活動状況を述べる由）孝の御札（孝和壽連滿意）並に孝養ケ條の略書（孝達章、孝徳章、孝經曰、心體安樂丸など記した一枚刷に施板者の名を入れたもの、現存十三種あり）を施しに出し、八月放生會、二月孝官聖廟（天満宮）への代参は二人づ、孝連の内より相勤め云々と孝學所の活動状況を披露している」とある。
- ・尼崎市史編集事務局『尼崎市史編集資料目録集一〇』昭和三九年（一九六四）。「二八 三根久昌氏文書」に「三一七 極楽伝来 心躰安樂丸 横帳 一二」とみえる。
- ・矢島玄亮編『本館所蔵未刊隨筆六八種索引』東北大学附属図書館、昭和三九年（一九六四）。「心体安樂丸（美二）」とみえる。
- ・唐澤富太郎『図説近代百年の教育』国土社、昭和四二年（一九六七）。「心体安樂丸」として一枚刷の影印あり、縮小により判読不可。唐澤博物館への書面での問合せの返信によると、御所蔵の御品が多く整理の途上であり、「心体安樂丸」の所在は不明である由。
- ・広瀬恒太『日田御役所から日田県へ』第一項一、西国筋郡代―塩谷大四郎正義 帆足コウ、昭和四四年（一九六九）。「……又民百姓に解り易い絵や文章で周知に努める「勤農掛札」や「極楽伝来心体安樂丸」等誰が読んでも判る文句で民政にとけ込む周知方法は異色であり」とある。
- ・岐阜県編『岐阜県史 通史編 近世下』岐阜県、昭和四七年（一九七二）。「方県郡河渡村の村木家」に「また同家には、つぎのような人間の心得を日々に服用する丸薬に托してのべたものもある」として「極楽待来 心体安樂丸」の冒頭が引用される。
- ・栃木県教育委員会事務局『栃木県史料所在目録 第七集』昭和五三年（一九七八）。「田村（吉）家文書（筆者注…上三川町 田村吉隆家文書）」に「〳三七四 極楽伝来心躰安樂丸処方書上」とみえる。
- ・鳩ヶ谷市文化財保護委員会編『鳩ヶ谷市の古文書第九集 小谷三志門人著作集Ⅰ―鈴木頂行集―』鳩ヶ谷市教育委員会、昭和五八年（一九八三）。同書に「八王子豊泉家文書」として、「余談が長すぎたが、この豊泉登八の子孫、八王子市新町の豊泉正男家には、昭和二十年に戦災をうけたにもかかわらず多くの不二道文献が保存されていた。その大部分は豊泉登七の写本で、最古は嘉永七年

（一八五四）豊泉かつの写本で「孝行子もり歌」と表題があり、小谷三志作の「子もりうた」次いで「十二月のまりつき歌」「一つとや気の世」「孝行和讃」「極楽伝来心体安楽丸」の五篇が写されている」とある。

・大谷大學圖書館『大谷大學圖書館藏林山文庫目録』昭和五十九年（一九八四）。「極楽傳來 應體安樂丸效實 其身野徳成 文政一三（一八三〇）一冊（附 楠傳萬能膏能書） 外大六四四四」とみえる。複写停止、ならびに、遠方により、未見。

・穴水町教育委員会『能登穴水藩領文書目録』昭和六〇年（一九八五）。「中居南 万年伝次郎家文書」「N雜」に「二 極楽伝来心体安楽丸（木版）不詳」とみえる。

・栃木県教育委員会事務局『栃木県史料所在目録 第一四集』昭和六〇年（一九八五）。「旧川西 阿久津正二家文書」に「一七一八 広告（極楽伝来、心躰安楽丸、包十八願、小包六字文）紙近世末期」とみえる。

・岡山県教育委員会『旧矢掛本陣石井家所蔵古文書目録 ―昭和五十九年度古文書調査報告書―』昭和六〇年（一九八五）。「心躰安楽丸」引札 未詳 一枚」とみえる。

・久喜市史編さん室『久喜市史調査報告書第八集 書家文書目録（一）』埼玉県久喜市、昭和六二年（一九八七）。「中太庄氏収集文書」に「二五二 広告（目覚御薬心躰安楽丸）幸手仲光寿斉荒三郎施 状」とある。

・群馬県教育委員会事務局部長室県史編さん室『群馬県近世史資料所在目録三四 山田郡大間々町』群馬県教育委員会、平成二年（一九九〇）。「小平 鹿沼和重家文書」に「一一七 心躰安楽丸能書 弘化二年（筆者注：弘化二年（一八四五）） 一 同（筆者注：鹿沼宗五郎）」とみえる。

・高槻市総務部文書課資料係編『高槻市史史料目録第二〇号』高槻市役所、平成一〇年（一九九八）。「撰津国島上郡 原村 谷耕治家文書目録」に「九三年月日未詳 大坂何某施板「心体安楽丸」「家内和合所其身野徳成」（心学倫理心得書）（木版）九八一―一」とみえる。

・山口県文書館『山口県内所在史料目録 第二七集 ―山口県文書館地方調査員調査報告 二七―』平成一二年（二〇〇〇）。「高瀬家文書」に「一六六 薬類効能書類（家伝神明散、御園白粉、心体安楽丸他）」とみえる。

◎散文で連ねるもの

- ・木版 安政 五年（一八五八）…『掃寄草紙』『日本國中豊年安樂丸』
- ・木版 明治一二年（一八七九）…『童蒙數學必携』卷之上雜題二「安樂丸」
- ・活字版 明治二八年（一八九五）…『少年世界』第壹卷第四號「日本國中心躰安樂丸」
- ・活字版 明治四〇年（一九〇七）…『中學生薔薇號』第貳卷第五號「日本國中心體安樂丸」
- ・活字版 大正一〇年（一九二一）…『修養と日誌』五月八日「一代安樂丸」

◎〈伝来薬「心躰安樂丸」〉と類似し明らかに関わりのあるもの

- ・書写 ———— 一年（———）…架蔵『心躰安養丸』書写本

※記される題目は「心■安養丸」であり、「■」は「月＋本」。書写の過程での「躰」の異体、乃至、誤写とみなし、『心躰安養丸』とした。

- ・木版 天保 六年（一八三五）…架蔵『孝の道』「一心傳受家内相續丸」

※文言の羅列や戯人名が類似し、該当文献の異なる箇所には、〈伝来薬「心躰安樂丸」〉に多くみられる道歌と近い、「〇くらくハ西にもあれバ東にもきたミちさがせミなミにもあり」の道歌が載る。

これら、存在のみが確認される内容まで確認できなかった諸本、散文を連ねる諸本、〈伝来薬「心躰安樂丸」〉と類似し明らかに関わりのある文献は、「伝来薬「心躰安樂丸」構成」に合致するものから着想を得て作成のなされたものと思われる。とはいえ、直接に比較するには構成そのものが異なるため、内容については本稿で触れない。

右の実態把握より、「石法」が確認できたことから、少なくとも文政元年（一八一八）には成立していたことが明らかになった。さ

らにこれらのうち、確認できたものに限っては〔羽寿〕を除いて、同刷・同筆のものがなく、様々な方面で出され書写されている。〔羽板〕にいたっては板木にも関わらず、これを用いた一枚刷は管見にない。〔羽浪〕は、先に挙げた、架蔵「蕃紅花人參湯」一枚刷とあわせて伝承されており、薬の宣伝のなぞらえであったために、広告の一種として扱われ、廃棄されやすかったと考えられる。明治より以降に出された活字版本も多く、戦前期まではかなり広く流布していたさまをうかがうことができ、現存の諸本は全体を考慮すれば九牛の一毛に過ぎないと考えられる。

三 伝来薬「心肝安樂丸」比較

構成の《前文》、《本文》、《後文》、それぞれの箇所にあられる統一の文言を示し、該当の文言の有無により印を付し、表に提示する。これにより、九つの種に分類することができ、これらをさらに五つの類にまとめ整理することができた。詳細は、前述の拙稿を参照されたい。文献紹介としては本来、手を加えずに諸本のみを比較した表を示すべきではあるが、紙幅と閲覧の便宜から、指標として九つの種と五つの類のくくりを設けた。

表の外に別して記したものを含め、便宜上に統一の文言を示すために、適当なものには漢字をあて、現行の仮名づかいへ改めた。諸本に最も多い順の配列とし類似のものは点線で区切り併記し、各々の種に特有のものは後にまわしている。該当の伝本にしかなく孤立し、個人の改変が認められ、かつ元のかたちが他の諸本の文言であろうと推定できるものには、推定したものに印を付した。なお、紙幅の都合により、さらにそれぞれの表を、【第一類―第二類】と【第三類―第五類】とに分けた。

（一）《前文》箇所
【前文】第一類―第二類
【前文】第三類―第五類

文前										構成	
に		は					い			内容	
願えばまこと有明の月		但し小包一服を朝夕とも常に用いてよし					一子相傳 極樂傳來 神隨傳來 一性			第一類	
○	○							○		早一	甲種
○	○							○		菱父	乙種
○	○							○		愚附	丙種
								○		西文	丁種
								○		石法	第一類
								○		羽板	乙種
								○		羽生	丙種
								○		名算	丁種
								○		羽静	第一類
								○		羽浪	乙種
								○		羽菊	丙種
								○		中塩	丁種
								○		一田	第一類
								○		森靈	乙種
								○		国連	丙種
								○		羽寿	丁種
								○		京麓	第一類
								○		東お	乙種

文前										構成	
に		は					い			内容	
願えばまこと有明の月		但し小包一服を朝夕とも常に用いてよし					一子相傳 極樂傳來 神隨傳來 一性			第一類	
○	○							○		早一	甲種
○	○							○		菱父	乙種
○	○							○		愚附	丙種
								○		西文	丁種
								○		石法	第一類
								○		羽板	乙種
								○		羽生	丙種
								○		名算	丁種
								○		羽静	第一類
								○		羽浪	乙種
								○		羽菊	丙種
								○		中塩	丁種
								○		一田	第一類
								○		森靈	乙種
								○		国連	丙種
								○		羽寿	丁種
								○		京麓	第一類
								○		東お	乙種

【本文】第一類―第二類】について、この他、第二類乙種派生〔森靈〕にある、「孝行は天地の恩を報ずることし」、「君臣父子の道は天地のごとし」、「鳩に三枝の礼あれば鳥にも反哺の孝あり」、「孝ある者は忠あり身を慎むは忠孝のもと」、「民百姓は人間の命の親玉」、「民百姓の油を絞るは下々の暗闇」、「主親も憐れみあれば忠孝の人多し」、「飯汁は生涯の守本尊」、「五常の嗜みは五穀のごとし」、「ただに立身出世を好むは青田を刈るのごとし」、「善を誘ふは外道の本人」、「人の悪を憂を悦ぶは人非人」、「悪人を見て善心に直す人の道」、「両舌は心でしだす偽金遣い」、「恠気嫉妬は互いに離縁のさきがけ」、「公事沙汰を好むは手の良い牢舎」、「理に賢きは七歳の翁理に暗きは百歳の童」、「短慮は智慧浅く氣儘ゆえ」、「苦の世界をしのぐは御釈迦の難行」、「骨病みは朽木のごとし」、「自墮落は二便所の戸障子」、「油断は敵愼みは味方なり」、「良き友は身の薬用悪しき友は身の持病となる」、「作法を破る者は我と首を縊るのごとし」、「悪を企む者は毒の間屋」、「媚び諂いは朝露のごとし」、「輕薄は嘘の上段」、「無慈悲の金持はその身一代長者に二代なし」、「質屋の庫より火事出るといふことあり」、「貧福は所帯によらずその心々に貧福あり」、「足る事を知らざれば餓鬼道」、「家内儉約は子孫長久の礎」、「上らる人を敬わず諸人に敬愛なきは人間の皮かぶり」、「使う人の務めは恵み使われる人の務めは忠孝の道理」、「旦那は頭のごとく召使の者手足のごとし」、「福は寝て待てとは寝たる心に邪なく」、「顔形のよき女房は宝にあらず心のよきが宝なり」、「そろばんは世帯の秤」、「諸藝は身に付いたる宝物」、「驕るは身を滅ぼす早飛脚」、「不正直にて神仏を祈るは罰を願うに同じ」、「両親は墨矩子供は鑿匏のごとし」、「師匠は似我蜂弟子は青虫我子となるのごとし」、「非道のわざをする人は剣の山に登るのごとし」、「生きながら性を転ぜし真似牛寺に往生寺」、「因果の道理を弁えて善と惡との種が大事」、「鈍でも金持は過去に良き種ある人」、「利発でも貧乏は善根の種なき人」、「人の死するを見て隣の火事と思うべし」、「ある上に欲をするは死ぬるを知らぬ人」、「死ぬことを知れば六文錢も法度」、「生きたるうちに褒めらるる人はこの世からの仏」、「仏と仏の世界なれば極樂参りが互いに大事なり」、「人多ければ国家賑わう一人にても出生大事大事」、「目連尊者も母のため盆祭りがそのしるし」、「唯心の浄土とは心の浄土を悟るべし」、「己身の弥陀とは男女の相に関わらず」、「仏心宗の旦那方高く眼をつけて見よ」は管見の他の諸本には確認されない。

同じく、第二類乙種派生〔国蓮〕にある、「敬神愛國の念は其家長久の立石」、「天理人道の行ないは直事の生ゆる実うえ」、「物に格て知る致すは治國安民の苗代」、「読書の多きを是とするは他の寶を数うるのごとし」、「一紙半様も熟知せば一字千金」、「一言半句を得て行解相應せば一生の寶」、「師に付きて学ばざるは寶の山より空手戻り」、「聖典を読むは人道往來の道中記」、「講釈を聞き得るは暗夜

の提燈」「書物は人間一代諸病の能書」「日々の品行は病を治するの良薬なり」「道を知りて行わざるは米櫃を枕に餓えとおる人」「書を読みて義を知らざるは盲者の京行き」「聲音の義理分曉なきは鸚鵡の人」「不学不教はあたかも卞和の璞を哭するがごとし」「軀を飢りて作すことを知らざるは芝居の看板」「形だけの業をするは芝居の藝者」「金銀だけの藝を見せるは千両役者」「我慢偏屈は世を渡る橋の不案内」は管見の他の諸本には確認されない。

また、第二類丁種諸本にある、「追加…朝起きは其身達者のもと」「追加…朝寐は其身病身のもと」「追加…楽は苦の種苦は楽の種」は、第二類丁種と第四類庚種を披見しあわせて成立したと思われる「羽奉」にあることを除き他系統に確認されず、第二類丁種の特徴である。

【本文】第三類―第五類】について、この他、第三類戊種諸本にある、「主人と親の無理は慈悲より出る」「父母の恩は海山のごとし」「子を愛するほど親に孝行すべし」、「慈悲知らずは身知らず」、●「貧乏は慳貪邪見のしるし」、「千畳敷に寝るも一畳」、●「よこしま事は其身の仇」、「好みし美麗な衣服は心の内の汚れ看板」、「身最良は其身の仇」、「慈悲は諸善の根本」、「名利は功德の仇敵」、「人を悪しく思うは身最良の強き故」、●「悪事を教える人は無分別の御頭」、●「負嫌いは猿智恵の大将」、「財宝は未来の貯えにならず」、「小事は大事のもと」、「正直は其身の寶」、●「殺生は短命災いの支度」、「世間の楽しみは苦しみの下繕い」、「信心は功德の元手」、「人事いうより己が癖をなおすべし」、●「後生の勤めは安楽を得る要行」、「人の疵をいうは我が疵の引札」は、●「●」を付したものが第二類乙種と第三類戊種を披見しあわせて成立したと思われる「(国五)」にあることを除き他系統に確認されず、第三類戊種の特徴である「(国五)」では、第三類戊種「主人と親の無理は慈悲より出る」の変形である「主人と親の無理は当たり前」と、第三類戊種「信心は功德の元手」の変形である「信心は徳を得るもと」をもち、さらに、「淫事は命根を断つ剣」、「三寶を誇るはさする手に喰い付く犬のごとし」を増補する。第三類戊種「農號」では、さらに、「腹八分に醫者いらす」、「野蠻は病人の首切り臺」、「災は口より出で病は口より入る」、「予防の一斤は治療の百斤に優る」を増補する。

また、第四類庚種諸本にある、「信力固くば災い起こることなし」、「語多きは物知らざるのしるし」、「片意地者は後悔のはじめ」は、第二類丁種と第四類庚種を披見しあわせて成立したと思われる「羽奉」にあることを除き他系統に確認されず、第四類庚種の特徴である。

【本文】第三類—第五類

構成		内容		本文																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
				ほ																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																					
第三類	乙戌	己種	庚種	辛種	丁庚	第一種	効能	親孝行は我が子孫のため																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																	

【後文】第三類―第五類】

後文		構成																						
へ		内容																						
此御薬の功能あげて救え難し あらましの分まずいずれなりとも用いて知るべし 此丸薬を持薬に用候御方は 何程の悪病たりとも速功有 第一出世をして運強金銀財宝を得て 諸人親しみ深く何の苦勞もなく 一性を安楽に送ること用いて知るべし 右教訓薬幼童大人常に用いて 生涯安楽無病長寿疑いなし 右いずれも空にて呑みこむべし すべて大人小兒とも不斷に用ゆるときは 無量の福德を得て一生無痕に諸人の氣請よく 家業繁昌子孫長久すること更に疑いなし 此文を見えやすき所に張置き常々心懸け 無智の人には説聞かすべし 善は其身を扶け人を救う 悪は其身を滅ぼし人を損なうなり 是を見聞して悪を慎み善を志すべし 右三首の歌の通り心得ればいかなる十惡五逆 の重病も本復して仏になるべし 右百ヶ條の功能は善につき惡につき用いて 見ざれば知れず仏も元は凡夫なり さればにや五戒より式百五十戒までの功能を とき給う 遺教経に曰く堪忍の徳たること 持戒苦行も及ぶことあたわず また孝を名づけ而て戒行となす 一切諸経法算経にも 一切衆生皆是吾子とあるも 実の一字を説き給えり 然れば五常の道に不遜者乎 右の御薬は親子夫婦兄弟一切差合いなし 但し此病は易きことに思召皆人知る所にして 御用い難き御方は身と家を持ちがたし 御先祖を思い身を知る御方は早く此病根を知つて 一性を一廻りとして呉々も 昼夜怠りなく御用い可被下候 尤も小兒かるき御方は 日々三度つつ嚙んで御含め可被下候 其外功能あまたあれどここに略す 近來紛らわしき類薬多くござる 日月星を御目当てに御求可被下候	○	早加	第三類	戊種	己種	庚種	辛種	丁庚	第五															
	○	羽片								農號	国五	羽瀧	河集	歎一	川文	凌一	草文	安文	吉佐	羽小	西借	羽新	羽奉	笠一
	○	○								○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

管見に孤立する、第五類壬種〔笠一〕にある、「堪忍をせざるは災の来たるが妙」、「慈悲深く情ある人は長命なるが妙」、「驕奢に長じたる人は苦勞を求むるが妙」、「剛欲深き人は大損をするが妙」、「分別をせぬ人は後悔をするが妙」、「人愛想よき人は繁昌する事が妙」、「人に無理をいう人は人罰を受けるが妙」、「腰の低き人はまた人が敬うことが妙」、「正直にして我が勝手をせざる者は運の来たるが妙」、「人に誠ある人は極楽になるが妙」、「邪見非道なる者は地獄へ墜るが妙」、「人に迷惑を懸ける人は災難の来たるが妙」、「心に悪しきと知つて行なう人は天罰の来たるが妙」、「善惡に報いあるを知らば心万法へ渡るが妙」は管見の他の諸本には確認されない。

《後文》《と》について、この他、各諸本に孤立する道歌を載せることがある。〔偲附〕には、「欲深き人の心と降る雪は積もるにつけて道を忘るる」とある。〔石法〕には、「人はただ親と主人と旦那寺我が請人を大切にせよ」、「主親は大切にせよ年寄ればやがて之の身も主親となる」とある。〔中塩〕には、「古哥を見／出し添書」として「人をただ吉野の花と詠うべし我を難波の芦というとも」とある。〔森霊〕には、「氣は長く心は太く色細く仕事は粗く食は不足に」、「過去は昨日現在ここにあるぞ未来は明日というが大切」とある。〔吉佐〕には、「一度も神仏頼む心こそまことのりになかう道なれ」、「川深く如來を頼む身になればのりの力に西へこそ行け」、「のりをきる道に心を定むれば南無阿弥陀仏と唱えこそすれ」、「ひとり来てひとり帰るも寂しさよ六字の名号道連れにする」とある。

結言

本稿では〈伝来葉「心鉢安樂丸」〉現存の諸本を管見の限り集め、表とすることにより、前述の拙稿を裏づけ、甲種から壬種という九つの種があり、第一類から第五類までの五つの類にくくることができるとを示した。

〈伝来葉「心鉢安樂丸」〉は、ほとんど同刷や同筆のものが確認されないことから、現存の諸本、ましてや管見に確認できたものは、大海の一滴に過ぎないであろうと思われる。存在のみが確認されるものとして紹介した一部には、小さく不鮮明な写真が掲載され、そのみでも未見の一枚刷であることのわかるものもある。後に新たな諸本が管見に入ることがあるならば、癸種以降とすべきいくつかの種や、第五類以降とすべきいくつかの類があることが想定される。

表を示すために思いの外に紙面を費やしたため、本稿においては、紹介、乃至、解題に留まる。また、管見のものは極力、私に翻字も行ったが、紙面の都合により詳細な書誌とともに提示することができなかった。画像も同様に、示すことができないことは遺憾である。新たに研究の俎上に載せた文献であるために、〈伝来葉「心躰安樂丸」〉の研究は、ひいては〈伝来葉「心躰安樂丸」〉を包括する、教化戯文という領域の研究は、これまで顧みられることなく停滞している。また、〈伝来葉「心躰安樂丸」〉と同じ趣向の、葉やその宣伝に模す教化戯文も散見される。「緒言」において研究の位置づけと意義を簡略に述べたが、現状、これらの研究に、好事家の戯言の感があることは否めない。だが、繰返すように、文献の伝承や人々の心意を明らかにするに好ましく、隣接する領域の研究にも資するであろう。新たな成果が導きだされるのは確実である。教化戯文のさらなる講究を、今後の課題としたい。

謝辞

多くの現架蔵の文献を、御蔵書のうちからお譲りくださいました、旧蔵者の小泉吉永様、『徳風』第廿四號につきまして、残部の行方と所蔵の有無を御教示くださいました、一向山稱念寺、ならびに法應山西方寺、御所蔵の御品の行方と所蔵の有無を御確認くださいました、唐澤博物館、御所蔵の御品の拝見をお許しくださいました、横浜開港資料館、小笠原家文書委託者様、早稲田大学図書館、潟上市郷土文化保存伝習館（石川翁資料館）、金沢市立玉川図書館近世史料館、内藤記念くすり博物館、その他御所蔵者様方、入手に御協力くださいました、書肆をはじめとする御仲介者様方、ならびに、閲覧の御取次に御尽力くださいました、國學院大學図書館に、簡略ながら篤く御礼を申し上げます。

註

1 拙稿「戯文〈伝来葉「心躰安樂丸」〉の濫觴と展開に関する小攷」『伝承文学研究』第七三号、三弥井書店、二〇二四。

- 2 伊藤慎吾『擬人化と異類合戦の文芸史』三弥井書店、二〇一七。伊藤慎吾「火事・戯文・人名―『仮名手本忠臣蔵』のパロディをめぐって」小松和彦編『搞いの大衆文化 天災・疫病・怪異』KADOKAWA、二〇二一。ほか、異類合戦物をはじめとする戯文、殊に精進魚類物に注目した論考。
- 3 鈴木棠三編『ことば遊び辞典』東京堂出版、一九五九。鈴木棠三『擬人名辞典』東京堂、一九六三。ほか。
- 4 年記は天保七年（一八三六）だが、「塩河南万村／瀧澤實治写之／弘化五年／三月吉日」とある。弘化五年（一八四八）。また、『前文』〈い〉には「極樂三国傳來」と、『前文』〈ろ〉には「心氣躰安樂丸」と、『前文』〈は〉には「大包十八願六十六人字／小包木字文十三文ン字」とある。後の書入れとみなし、墨塗りの文言を用いた。
- 5 吹田市史編さん委員会編『吹田市史 第六卷』吹田市役所、一九七四。
- 6 石川謙『日経新書七 心学』日本経済新聞社、一九六四。なお『「かなめ草」』に後になって収録された一枚刷り施印」とされるが、管見の限りの『かなめ草』諸本には収録がない。
- 7 那波利貞「唐朝政府の醫療機構と民庶の疾病に對する救濟方法に就きての小攷」『史窗』第一七・八合併号、京都女子大学史学研究室、一九六〇。ならびに、後藤捷一『古書に見る近世日本の染織』大阪史談會、一九六三。
- 8 御坂町誌編纂委員会編『御坂町誌資料編』御坂町役場、一九七二。
- 9 河合町史調査委員会『河合町史』河合町役場、一九八一。
- 10 大井町史編さん委員会編『大井町史料第二十三集 大井町諸家文書集一―鶴ヶ丘・亀久保地区―』大井町教育委員会、一九八二。
- 11 解説川守田ヒロ「森嘉兵衛資料集「極樂傳來心體安樂丸」」『岩手の古文書』第二二号、岩手古文書学会、二〇〇八。
- 12 『太田村郷土史資料第二輯』太田公民館、一九六八。
- 13 大和高田市史編纂委員会編『改訂 大和高田市史 史料編』大和高田市役所、一九八二。
- 14 なお、『あつめ草』所収「御代乃恩澤」卷之三には、類似する、「へ極らくハ西に有とハ唯い、そ。鬼も仏もみな身にぞあり」の道歌が載る。殊に南なのは、あえて六字名号に返点を付すと「南_{ニハ}無_シ阿弥陀仏」であるための諧謔によるか。